

上を向いて歩いて、すがすがしい気持ちになれる都市を作ろう

加藤浩徳(東京大学大学院工学系研究科)

kato@civil.t.u-tokyo.ac.jp

先日、アジアからのある留学生が、私に相談したいことがあると言ってやって来た。「歩行空間の研究に関心がある。研究するにあたり、東京で一度は参考のために見ておいた方がよいお勧めの場所はあるか。」私は、この質問を受けて、いろんな場所を思い浮かべた。お台場、表参道、浅草寺仲見世通り、武蔵小山の商店街、田園調布の住宅街路...でも、どれも個人的にお勧めとは言い難い。単に私が浅学なだけだが、それにしてもずいぶん難しい質問だ。

歩く、という意味では、私は、生まれ故郷の奈良の街を歩くのがとても好きである。旧市街地内の古い街並み、風格ある寺社寺院、生い茂る木々、すぐそばに迫る山々等を見ながら歩くと、何だか歩くペースがゆっくりとなり、心も安らぐ。また、面白いのは街中でしばしば動物に出くわすことである。鹿はその辺りをうろうろしているし、そこらの池には鯉や亀がたくさんいる。思いがけない発見ができたりして、とても楽しい。もちろん、これには、古都ならではの環境や、比較的低い人口密度が影響していることは、間違いない。

東京にも、部分的には、奈良と似た感じの場所がないわけではない。例えば、谷中から上野公園にかけての辺りには、比較的似た雰囲気があるし、たまに1人でゆっくり歩いてみると、なかなか悪くはない。だが、両者の間には、決定的な違いがあるように思う。それは、「空」の見え方である。

我が国の都会で上を見上げると、実に醜い。高さもデザインもてんでバラバラなビルが平気で並べられ、色や形の違う屋根の低層の家屋が乱立している。さらに、その上には醜いアンテナが無造作に立てられ、街路には、無数の電柱が空を這っている。それに、排気ガスで空気も濁り、視界も良くない。にもかかわらず、みんなその醜さに麻痺してしまっている。いったん立ち止まってゆっくり上を見るなんてことは、日々の生活に追われて、ゆっくり歩くことの素晴らしさを忘れた人々には、ほとんど忘れられた行為だ。だいいち、我々は、年に何回、夜空の星々をじっくり眺めるだろう。

また、建物や乗り物のことばかり考えている人々にとっても、「空」は、どうでもいいものとなっている。みんなどんどん忙しくなって、ゆったりと過ごす時間が失われている。実際にゆっくり歩いてみないと、晴れた日に透き通るような青空を満喫したり、その空をバックにする美しい風景を楽しむことの素晴らしさは、身にしみては感じられない。

歩行者が幸せになれる都市環境、これは、これからの我が国の都市・交通計画にとって、とても重要な課題である。そして、「空」は、歩行者にとって極めて重要なアイテムだと思う。

上を向いて歩いて、すがすがしい気持ちになれる、空のきれいに見える、そんな都市を作ろうではないか■